

古代文明における夷夏互化融合

解題

本稿は、王震中先生の講演「夷夏互化融合説・早期文明演進中的中原与東夷」(於早稲田大学、早稲田大学長江流域文化研究所主催、二〇一八年十一月十六日)に基づく中国語原稿を全文翻訳したものである。王震中(柿沼陽平訳)『中国古代国家の起源と王権の形成』(汲古書院、二〇一八年)と併せて読んでいただきたい。

第一節 夷夏の概念と夷夏の關係

傅斯年は一九三三年に、著名な「夷夏東西説」を発表¹⁾、中国史学界・考古学界に大きな影響を与えた。夷夏東西説は、後漢以降の中国史とその政治的展開を地理的に南・北に分け

王 震 中(柿沼陽平監訳、小田凌平訳)

うるものとする通説に対し、それ以前(夏商周三代以前)の政治は部落から帝国へと、黄河・済水・淮河流域を歴史的舞台として進んできたと考えられるものである。その地域は、おもに東・西に分けられ、東の諸夷(山東半島海岱地区を中核とする)と西の諸夏(中原地区を中核とする)が対置される。これについて筆者は、夷夏が東・西に分布するだけでなく、たがいに融合する側面もあったと考える。そこで本稿では、傅斯年の「夷夏東西説」から出発し、中原と海岱地区とが文明の起源と早期発展の過程において、たがいに作用・影響しあい、融合した史実をふまえ、かつ中国古代国家形態の構造が方邦の林立する単一制的都邑邦国から多元一体的複合制の夏商王朝国家へすすむ過程をもむすびつけて、「夷夏互化融合説」を提出する。

夷夏關係にふれる場合、「夷」と「夏」の概念に説明を加

える必要がある。一般的な意味としては、「夏」は夏王朝も華夏民族もさしうるものであり、きわめて限られた状況下では、「夏」はとくに姒姓の夏部族をさす。だが、本稿でいう「夏」の「夏」は、夏王朝をさすのでも、小さな族的共同体の夏部族をさすのでもなく、大族共同体の華夏民族をさし、夏代よりまえの華夏集団をも含意する。筆者の研究によると、華夏民族は夏代に形成されたが、夏商時代の華夏民族は「自在民族」「民族意識が曖昧で潜在的な状態の民族」にすぎず、西周・春秋戦国時代になると、華夏民族は「自覚民族」「強烈な民族の自覚意識をもつ文化民族」となる。²⁵⁾

夏代よりもまえの中国上古民族区分について、蒙文通は一九二七年に著わした『古史甄微』で、それを「江漢民族・河洛民族・海岱民族」の三系統に区分し、各々を「炎族・黄族・秦族」とよんだ。徐旭生『中国古史伝説時代』（一九四〇年代初版、一九六〇年代増訂）は、かつて中原をおもな歴史的舞台とした炎帝族と黄帝族をあわせて「華夏集団」とよび、海岱地区の族群を「東夷集団」とよび、南方の族群集団を「苗蛮集団」とよんだ。蒙文通・徐旭生の分類には相異点と合致点がある。相異点は、蒙文通のいう上古「江漢民族」がじつは炎帝族をさし、炎帝族は炎族ともよばれ、南方出自とされるのに対して、徐旭生は炎帝族を陝西省宝鸡県出自の華夏集団とすることである。合致点は、蒙文通・徐旭生の分けるところが対応しうるもので、それゆえ両者の区別は地理的

にも共通することである。もつとも、蒙文通・徐旭生の用語の概念についていえば、筆者は徐旭生の用語に賛成する。すなわち、中原地区は「華夏集団」、海岱地区は「東夷集団」、江漢地区は「苗蛮集団」とよびうる。これより、本稿では夷夏関係について論ずるさいに、夏代以前の「華夏民族」の前身となる中原の混合的族群を原則的に「華夏集団」とよび、行論の都合上、「華夏」と略称することもあるということにとどめる。

「夷夏」の「夷」も民族の概念である。春秋時代において「夷」は、「東夷」をさすこともあれば、非華夏族の総称でもあった。総称としては、『左伝』定公十年に孔子の言葉として「裔不謀夏、夷不亂華（裔は夏を謀らず、夷は華を亂さず）」とある。ここでは「裔」と「夷」が対応し、「夏」と「華」が対応し、「夷」はひろく非華夏族をさす。かかる総称は「蛮夷」や「夷狄」のかたちで用いられることがあり、たとえば『公羊伝』成公十五年に「春秋」……内諸夏而外夷狄（『春秋』……内は諸夏、外は夷狄なり）、『左伝』僖公二十一年に「任・宿・須句・顛與風姓也、實司大皞與有濟之祀、以服事諸夏……蠻夷猾（乱）夏、周禍也（任・宿・須句・顛與は風姓にして、實に大皞と有濟の祀を司り、以て諸夏に服事す……蠻夷の夏を猾すは周の禍なり）」とある。ここで「諸夏」と対照をなす「夷狄」と「蛮夷」の「夷」は、いずれも総称である。

春秋時代に、「夷」が東夷のみをさす場合に用いられるのが、「東夷」という呼び方である。『左伝』僖公四年では、陳の轅濤塗が鄭の申侯に「師出於陳・鄭之間、國必甚病。出於東方、觀兵於東夷、循海而歸、其可也（師、陳・鄭の間に出版、國は必ず甚だ病む。東方に出れば、兵を東夷に觀し、海に循いて歸らば、其れ可なり）」とのべている。陳の轅濤塗の発言において、「東夷」が東方に位置していることは明確である。また『左伝』僖公十九年に「夏、宋公使邾文公用邾子于次睢之社、欲以屬東夷（夏、宋公は邾の文公をして、邾子を次睢の社に用いしめ、以て東夷を屬せんと欲す）」とある。ここで「東夷」が意味しているのも、春秋時代に海岱地区における、なお華夏化していない土着の族群である。

『左伝』文公五年・文公九年・襄公二十六年・襄公二十九年・哀公十九年等にあらわれる「東夷」も同様である。ほかに『左伝』昭公四年で楚の椒棼は「商紂爲黎之蒐、東夷叛之（商の紂、黎の蒐を爲して、東夷は之に叛く）」とのべ、『左伝』昭公十一年で叔向は「桀克有緡、以喪其國、紂克東夷、而隕其身（桀は有緡に克ちて、以て其の國を喪ほし、紂は東夷に克ちて、其の身を隕す）」とのべており、ここでの「東夷」が意味しているのは、商の紂王時代における海岱地区の土着族群である。³⁾

春秋から商・西周までさかのぼると、夷と東夷の呼称が早々に出現しており、その起源が古いことが看取できる。西周青

銅器銘文中に「東夷」の呼称がある。商代では、東夷は「人方」とよばれ、甲骨文の「人方」とは「夷方」で、甲骨卜辞の「王征人方」とは「王征夷方」である。⁴⁾

夏代の東夷については、甲骨文・金文のように同時代の者が書いた史料がなく、せいぜい『史記』夏本紀や『古本竹書紀年』等の夏代以後の史料によつて問題を説明しうるのみである。これらの史書では、夏と対応する東方の土着の人びとは「夷」「嵎夷」「九夷」（吠夷・于夷・方夷・黄夷・白夷・赤夷・玄夷・風夷・陽夷）等と称された。それらは東方に位置するため、「東夷」と一括してよぶことも可能である。「夷」と「東夷」の概念は華夏に対応して存在するもので、かりに華夏民族の形成を夏王朝出現のしるしとすると、夷夏関係における夷や東夷にとつて、夏代はその重要な時間的分岐点となる。筆者が夏代以前における「華夏民族」の前身としての中原族群を「華夏集団」とよぶのと同じように、筆者は夏代以前の東夷族群を原則的に「東夷集団」とよび、行論の都合上、場合におうじて「夷」や「東夷」と略称することとする。夷夏の関係には、東西が対峙するという側面もあれば、相互交流・相互影響・相互転化するという側面もある。分布している場所に関しては、たしかに傅斯年がいうように、夷と夏は東と西に分かれて住んでおり、かかる布置は夏代よりまえに形成され、かつ夏商以後もつづいた。夷夏がたがいに融合するという点は、夏代よりまえの五帝時代にもはじまっ

ており、夏商以後もつづいた。それゆえ「夷夏互化説」についての場合には、夏代よりもまえから説き起こす必要もあるのである。

第二節 夏代以前における夷夏互化融合

夏代以前に「夷」「夏」が融合する過程では、夷族人が融合して華夏族となることもあれば、華夏族が夷族になることもあった。その結果、夷と夏は交互作用と相互転化をつうじて、最終的に華夏民族を形成した。

二― 東夷から華夏となつた虞舜―民族融合の例―

周知のとおり、「堯舜禹禪讓」の古史伝説によれば、中原地域の堯舜禹部族連盟のなかでは、舜が重要な地位を占めている。このときに舜は盟主として、都を山西省西南部の永濟県―平陸県一帯に定めた。たとえば『帝王世紀』『史記』五帝本紀『集解』所引』には「舜所都、或言蒲阪、或言平陽、或言潘（舜の都する所は、或いは蒲阪と言ひ、或いは平陽と言ひ、或いは潘と言ふ）」とある。「蒲阪」とは現在の山西省永濟県である。『史記』陳杞世家には、堯がかつて二女を舜に嫁がせて「居于媯汭（媯汭に居らしむ）」とある。『帝王世紀』『史記』五帝本紀『索隱』所引』には「媯水在河東虞郷縣歷山西（媯水は河東虞郷縣の歴山の西に在り）」とあり、

『括地志』『史記』五帝本紀『正義』所引』には「媯汭水源出蒲州河東南山（媯汭の水源は蒲州の河東南山より出づ）」とある。この地も蒲阪といい、現在の山西省西南の永濟県にあたる。また舜は「虞舜」ともよばれ、有虞氏の人である。虞舜の都城も虞城とよばれる。虞城は、現在の河南省虞城県で、山西省平陸県にも虞城がある。山西省平陸県の虞城は、『史記』秦本紀『正義』引『括地志』に「虞城故城在陝州河北縣東北五十里虞山之上、亦名呉山、周武王封弟虞仲於周之北故夏墟呉城、即此城也（虞城の故城は陝州河北縣東北五十里の虞山の上に在り、亦た呉山と名づけられ、周の武王は弟の虞仲を周の北の故の夏墟の呉城に封じ、即ち此の城なり）」とある。その場所は現在の山西省平陸県である。河南省東部の虞城に關しては、有虞氏が東から西へと發展する途上における拠点である。よつて、虞舜が堯舜禹部族連盟の盟主であつたとき、虞舜邦国の都城は山西省西南部の永濟―平陸一帯にあつたと考えられ、ゆえに『史記』五帝本紀には「舜、冀州之人也（舜は、冀州の人なり）」とあり、いにしえの冀州は山西省と河北省を含むのである。

もつとも、舜はほんらい東夷の人である。『孟子』離婁下に「舜生於諸馮、遷於負夏、卒於鳴條、東夷之人也。（舜は諸馮に生れ、負夏に遷り、鳴條に卒し、東夷の人なり）」とある。諸馮は現在の山東省諸城県にある。清の『諸城県志』に「縣人物以舜爲首、古迹以諸馮爲首。（當該）縣の人物は

舜を以て首と爲し、古迹は諸馮を以て首と爲す」とある。現在の山東省諸城県は、前漢のときには諸県で、春秋時代には魯国の邑のひとつであった。『春秋』 莊公二十九年には「城諸及防（諸及び防に城く）」とあり、『春秋』 文公十二年には「季孫行父帥師、城諸及防（季孫行の父、師を帥いて、諸及び防に城く）」とあり、楊伯峻『春秋左伝注』には「諸・防皆魯邑（諸・防は皆な魯邑なり）」とある。朱玲玲「舜為「東夷人」考」は「諸馮とは諸であろう。言語の観点からいうと、諸馮の馮字は輕読音尾音で、つまり北京語の凡のように軽く読む接尾辞の音であり、諸に付属する文字は省くことができるもので、省かなければ「諸馮」、尾音を省けば「諸に作る」とする。清初の張石民『放鶴村文集』「諸馮辯」にも「諸城得名、以魯季孫行父所城諸、所城諸得名、則以諸馮……旧有舜祠（諸城の名を得るは、魯の季孫行の父の城く所の諸を以てし、城く所の諸に、名を得は、則ち諸馮を以てし、……旧と舜祠有り）」とある。それゆえ筆者によれば、諸馮は山東省諸城県にあり、それは孟子が舜を「東夷人」とするのと合致し、舜の出生地・虞舜族の発祥地は現在の山東省諸城県にあるのである。

すると舜はどのように山東省諸馮から山西省蒲阪へと遷徙し、そのルートを進めることができるのか。豫東の虞城は東から西へ遷徙する過程における重要な拠点だと考えられる。『左伝』昭公八年には「舜重之以明德、寘德于遂、遂世守之、

及胡公不淫、故周賜之姓（舜は之に重ぬるに明德を以てし、徳を遂に寘き、遂は世々之を守り、胡公に及ぶまで淫せず、故に周は之に姓を賜う）」とあり、『史記』陳紀世家には「陳胡公滿、虞帝之後也（陳の胡公滿は、虞帝の後なり）」とあり、『史記』周本紀には「武王追思先聖王、乃襲封……帝舜之後于陳（武王は先の聖王を追思し、乃ち襲して……帝舜の後を陳に……封ず）」とあり、周の武王が帝舜の末裔を陳に封建したのは、陳の地がもともと虞舜族の重要な居住地のひとつであったからである。『史記正義』引『括地志』には「陳州宛丘縣在陳城中、即古陳國也（陳州の宛丘縣は陳城中に在り、即ち古の陳國なり）」とあり、陳は現在の河南省虞城県である。この地は虞舜が諸馮から西へと遷徙・発展するさいの第一の拠点であるとみなせる。

舜は中原地域に來たのち、帝堯を繼承し、堯舜禹族邦連盟の盟主となった。これは古史伝説にひろく伝わる堯舜禹禪讓の故事である。舜や、舜とともに遷徙した族人は、中原にやってきたのち、華夏集団の一員となった。こう考えてこそ、『史記』に「舜、冀州之人也」とあることと、『孟子』に「舜、東夷之人也」とあることとの矛盾を解釈できる。『礼記』中庸には「仲尼祖述堯舜、憲章文・武（仲尼、堯舜を祖述し、文・武を憲章す）」とある。孔子・孟子等の諸子百家の眼には、堯舜禹はみな華夏民族の聖人として映る。じつさいには正確にいえば、堯・舜はともに夷狄から華夏に変化した、華

夏の聖人なのである。⁽⁶⁾

二― 中原族邦連盟内の皋陶と伯益

堯舜禹族邦連盟のうち、東方出自の重要な盟友は、虞舜のほかに、少なくとも東方の皋陶と伯益の諸部族がいる。皋陶に關しては『論語』顔淵篇に、孔子の弟子の子夏が「舜有天下、選於眾、舉皋陶、不仁者遠矣（舜は天下を有ち、眾より選び、皋陶を擧げ、不仁者は遠ざかる）」といったとあり、『史記』夏本紀にも「帝禹立而舉皋陶、薦之、且授政焉、而皋陶卒（帝禹立ちて皋陶を擧げ、之を薦め、且つ政を授け、皋陶卒す）」とあり、いづれも皋陶が堯舜禹族邦連盟のなかで要職を担ったことをのべている。『左伝』昭公十四年⁷、『呂氏春秋』君守篇⁸、『史記』夏本紀等によれば、皋陶が担ったのは、刑法をつかさどる重要な職務である。

伯益とは柏翳で、秦人の先祖である。『史記』秦本紀には、秦之先、帝顓頊之苗裔孫曰女脩。女脩織、玄鳥隕卵、女脩吞之、生子大業。大業取少典之子、曰女華。女華生大費、與禹平水土。已成、帝錫玄圭。禹受曰「非予能成。亦大費爲輔」。帝舜曰「咨爾費、贊禹功、其賜爾皐游爾後嗣將大出」。乃妻之姚姓之玉女。大費拜受、佐舜調馴鳥獸、鳥獸多馴服、是爲柏翳。舜賜姓嬴氏（秦の先は、帝顓頊の苗裔にして、孫を女脩と曰う。女脩織るとき、玄鳥卵を隕し、女脩之を呑み、子の大業を生む。大業、

少典の子を取り、女華と曰う。女華は大費を生み、禹と與に水土を平らぐ。已に成り、帝は玄圭を錫う。禹受けて曰く「予の能く成すに非ず。亦た大費輔を爲す」と。帝舜曰く「咨、爾費、禹の功を贊け、其れ爾に皐游を賜いて爾の後嗣は將に大いに出でん」と。乃ち之に姚姓の玉女を妻わす。大費、拜して受け、舜を佐けて鳥獸を調馴し、鳥獸は多く馴服し、是を柏翳と爲す。舜は姓嬴氏を賜う」と）

以上の記載は四点のメッセージを伝える。

① 秦人の女性の始祖「女脩」が玄鳥の卵を呑み、男性祖先の「大業」を産むという「祖先誕生神話」は、秦人の上層集団のトーテム崇拜が東夷の少皞氏のトーテムと一致することをしめす。

② 秦人の祖先「大費」は、族邦連盟のなかで舜を補佐し、鳥獸を飼い慣らし、牧畜業を發展させた。

③ 大費はさらに大禹を補佐して「平水土（水土を平らかに）」し、洪水の被害を治めた。

④ 秦人の上層集団は嬴姓である。秦人の祖先の事跡は『孟子』滕文公上に「舜使益掌火、益烈山澤而焚之（舜、益をして火を掌らしめ、益は山澤を烈やして之を焚く）」とあり、『国語』鄭語に「伯翳能議百物（伯翳は能く百物を議す）」とあり、そのほか「伯益作井（伯益、井を作る）」という伝説がある。これらはすべて伯益（柏翳）

が中原族邦連盟の文明の発展に対しておこなった重要な貢献である。

皋陶は偃姓、伯益は嬴姓で、偃・嬴は同音で通じ、両者は関係の緊密な部族である。嬴姓は東夷の大陸、少皞は嬴姓で、ゆえに皋陶と伯益はさかのぼると少皞部族と関係する。皋陶と少皞部族の関係については、『帝王世紀』『史記』夏本紀『正義』引に「皋陶生于曲阜（皋陶は曲阜に生まる）」とあり、『左伝』定公四年には曲阜がほんらい「少皞之墟」であるとあり、これによっても皋陶部族が少皞部族から生まれたことを裏づける。少皞は東夷族で、間違いなく皋陶・伯夷も東夷族である。皋陶の末裔には、英・六・蓼・群舒（舒鮑・舒蓼・舒襲・舒庸・舒龍・舒鳩）があり、現在の安徽省六安一帯に分布し、これは皋陶族が南遷して発展した結果である。嬴姓の秦はのちに現在の中国西部にあらわれ、嬴姓の趙も現在の河北にあらわれ、どちらも嬴姓部族が東から西へ遷徙して発展した結果である。商周時代に、少なくとも秦人の祖先のうち、滎からおこり、『史記』秦本紀には彼が「在西戎、保西垂（西戎に在り、西垂を保）」つたとあり、嬴秦がすでに中国西部の甘肅省天水に遷徙していたことをしめす。これ以降の秦人の族源は、二つの部分よりなる。すなわち、君主を核とする上層（嬴姓の貴族）は、東部の海岱地区から遷ってきたものである。埋葬の習俗として屈肢葬を採用している下層貴族と一般民衆は、甘青地区の生まれである。よって西

周・春秋戦国時代の秦人は、東夷と西部の戎人とが融合した結果である。

二―三 仰韶・龍山時代の中原と東夷の文化交流

考古学的文化の面では、中原の仰韶文化の彩陶が海岱の大汶口文化に影響をあたえたこと、中原で登場する形式が大汶口文化の墓地・墓葬にみられること、さらには海岱地区の龍山文化の黒陶が中原に影響を与えたことをみてとれる。

中原と海岱地区の文化の影響と交互作用は、けっして仰韶時代にはじまったものではない。仰韶時代以前に、河南省の裴李崗文化は、山東省の北辛文化とのあいだで互いに交流・影響しあっていた¹²。仰韶文化中期になると、黄河中流域に分布する、円点と孤辺三角形よりなる仰韶文化廟底溝類型の彩陶のモチーフが、黄河下流域の大汶口文化に強烈な影響を与えている¹³。夷夏の関係についていえば、これは西から東への影響である。

東から西へ影響・遷徙もあった。たとえば仰韶文化中晩期には、仰韶文化のなかに東の大汶口文化に由来する要素があるからに増え、陶器については、鄭州大河村遺跡に出現する大汶口文化の釜形鼎・罐形鼎・背壺・浅盤豆・盃などはみな、大汶口文化の同類の器物と同じである。同時に、大河村遺跡においては、大汶口文化の副葬品と同じ墓が発見され、当時すでに少数の大汶口人が西へ遷徙していたことをしめす¹⁴。大

汶口文化晩期には、豫東地区（たとえば鹿邑秦台遺跡・鄆城段寨遺跡など）において、大汶口文化の風格のある遺跡が登場する。中原の奥まったところにある河南省偃師滑城、平頂山寺崗遺跡などでは、大汶口文化の遺跡や墓がみつかり、これらはすべて一部の東夷人が中原にやってきて残したものである。

龍山時代になると、豫北に分布する後崗二期文化が海岱龍山文化と隣接しているがゆえにその影響を深く受けたこと以外に、海岱龍山文化で流行した磨製黒陶が中原龍山文化に対して広く影響を与えた。海岱龍山文化の磨製黒陶のうち、陶胎が卵殻のように薄いものは、考古学者に「蛋壳黒陶」とよばれており、精美なもので、龍山時代の制陶技術の最高水準をもあらわしている。東夷のかかる卓越した制陶技術は、文献の記載によって裏づけられる。『韓非子』難一に「東夷之陶者器苦窳、舜往陶焉、期年而器牢（東夷の陶者は器苦窳なり、舜は往きて陶し、期年にして器は牢し）」とあり、『周礼』考工記にも「有虞氏尚陶（有虞氏は陶を尚ぶ）」とある。「有虞氏尚陶」とは、東夷人全体が堯舜禹時代に陶器をたつとんでいたことを端的にあらわしており、彼らが東夷人に付きしたがって西の中原に遷り、華夏集団と融合し、中原の製陶に影響を与えたことが容易に看取できるのである。

第三節 夏商王朝の多元一体的複合制国家 構造と夷夏の融合

堯舜禹時代は歴史的に「万邦」とよばれ、第一に邦国が林立し、第二に中原地区では族邦連盟が組織されていた。族邦連盟が長期にわたり安定的に発展する過程は、連盟内の各邦国と部落の間、あるいは酋邦間の部族血縁の垣根をなくしていくのを助けた。この意味では、このときの華夏集団と堯舜禹族邦連盟はある程度一致する。しかし、族邦連盟は結局のところゆるやかなもので、不安定なもので、盟主の交代が起こり、連盟の中心も移った。したがってこのときの華夏集団を華夏民族の前身とみなせる。

夏代が開始すると、夏商王朝は国家構造上、多元一体的複合制である。それは、王国と王の支配する諸侯邦国という二大要素をふくむ王朝である。その構成要素からみて、それは多元的であり、しかも王朝国家全体は一体性も有している。

この一体性が堯舜禹万邦時代の華夏集団を、夏代の華夏民族へと向かわせた¹⁶。これにより、夏商西周三代の政治的局面は以下の通りになる。すなわち、国家構造は多元一体的複合制をしており、族共同体の類型上は華夏民族を形成する。また夷夏関係のうえで、夷夏が融合し、その結果、華夏民族は雪だるま式に大きくなり、海岱の東夷民族は徐々に少なくな

り、秦漢時代までに基本的に消失する。

三― 夏代において華夏へと融合した夷族

夏代にどの部族が華夏へと融合を開始し、どの部族がまだそうなっていないのか。これをいったいどうやって判断するのか。案ずるに、およそ複合制的王朝国家構造に参入することとは、華夏民族へと融合しはじめることであり、その反対は、まだ華夏民族へと融合しはじめていないということである。なぜなら民族と国家の関係において、王朝国家は民族の枠組みだからである。

『左伝』襄公四年には、「因夏民以代夏政（「后羿」、「夏民に因りて以て夏政に代わる）」とある。「后羿」は「夷羿」ともよばれ、東夷族の一員であり、彼はいちど夏王に代わって、夏王朝の国君となりえた。これは、夷族が華夏族へと融合した典型例である。

山東省藤県に位置する薛国は、夏王朝で車を作る仕事を担った。『左伝』定公元年には「薛之皇祖奚仲居薛、以爲夏車正（薛の皇祖奚仲は薛に居り、以て夏の車正と爲る）」とある。

『世本』・『荀子』解蔽篇・『呂氏春秋』君守篇・『淮南子』修務訓には「奚仲作車」とある。二里頭遺跡ではすでに車の轍の遺跡がみつかったっており、夏代にすでに車があったとわかる。これは、奚仲が車を発明・製造したという伝説が信頼しうることを物語る。薛国の君主という、専門的に夏王のために車

を作る車正は、王朝における在朝官となり、これも東夷族が華夏族へと融合した例である。

三― 夏代の華夏へ未融入の夷族

夏代には海岱に「九夷」（吠夷・于夷・方夷・黄夷・白夷・赤夷・玄夷・風夷・陽夷）がいた。これら諸夷は、ほんらい複合制的国家構造の外部にあり、「体制」外のいわゆる蛮夷の邦であった。また、かかる複合制的構造は開放的で、理念上、夏商の王は天下の「共主」。「諸侯がみんで奉戴する主の意」なので、諸夷と夏王の関係は時期によって疎でも密でもあり、叛服常なき関係であった。彼らと夏王朝が友好的往来や服属関係を維持していたときには、しよっちゅう夏王に朝見し、歴史的には「來賓」とよばれる。彼らが夏王朝に謀反を起こすと、夏王は彼らを征伐しにいった。たとえば『古本竹書紀年』には一連の関連記載がある。¹⁹⁾

（帝相）元年、征伐淮夷（元年、淮夷を征伐す）『太平御覽』卷八二皇王部所引。

二年、征風夷及黄夷（二年、風夷及び黄夷を征す）『太平御覽』卷八二皇王部所引。

七年、于夷來賓（七年、于夷、來りて賓う）『後漢書』東夷傳注所引。

後少康即位、方夷來賓（後に少康即位し、方夷、來りて賓う）『後漢書』東夷傳注所引。

柏杵子征于海及王壽、得一狐九尾（柏杵子は海及び王壽に征し、一狐の九尾を得）『山海経』海外東経注所引』。

后芬即位、三年、九夷来御、曰吠夷・于夷・方夷・黄夷・白夷・赤夷・玄夷・風夷・陽夷（后芬即位し、三年、九夷来り御し、吠夷・于夷・方夷・黄夷・白夷・赤夷・玄夷・風夷・陽夷と曰う）『太平御覧』卷七八〇四夷部』。

后荒即位、元年、以玄珪賚于河、命九東狩于海、獲大鳥（后荒即位し、元年、玄珪を以て河に賚し、九東に命じて海に狩して大鳥を獲る）『北堂書鈔』卷八九禮儀部所引』。

后泄二十一年、命吠夷・白夷・赤夷・玄夷・風夷・陽夷（后泄二十一年、吠夷・白夷・赤夷・玄夷・風夷・陽夷に命ず）『後漢書』東夷伝注所引』。

后發即位、元年、諸夷賚于王門、再保墉会于上池、諸夷入舞（后發即位し、元年、諸夷、王門に賚い、再び保墉たりて上池に会し、諸夷は入りて舞う）『北堂書鈔』卷八二禮儀部所引』。

上述の諸夷はなお夏王朝の国家体系に取り込まれていない夷人で、夏王朝と叛服常なき状態にあり、民族の融合の点で、彼らはまだ華夏民族に溶け込んではいない。もともと夷夏概念と夷夏関係とは、夏王朝の出現と華夏民族の形成によって、はっきりと浮かび上がってきたものである。夏代における東方諸夷と中原華夏は、その東西の対峙は互化融合よりもはる

かに顕著であり、この点は考古学的徴証を得られる。

考古学的に、中原龍山文化末期と二里头文化第一期〈第三期は、一般に夏文化とされる。これに対して、海岱の岳石文化は、夏代の東夷文化である。岳石文化でみつかったものに青銅器があり、版築の城壁もあり、都邑邦国文明であるが、その文明度は中原地区にはるかに及ばない。つまり、夏代以前の龍山時代の中原文明と海岱文明の発展度を比べると、龍山時代の中原と海岱は互角であり、当時は文明のセンターが複数あり、各区域ではいずれも自らのセンターがあった。だが夏代になると、夏王朝が中原地区で勃興し、王朝国家の王都所在地を「天下の中心」とする構えが生まれたことで、四裔〔東西南北の辺境〕の文化と文明の高度さは、中原地区とかけ離れ、海岱地区の東夷はかかる事態となった。岳石文化の文明度はとくく中原の華夏に及ばなくなった。そのもうひとつの要因は、龍山時代の東夷文明の高度さをしめす虞舜・皋陶・伯益・后羿等の政治的実体が海岱地区を離れ、海岱地区の文明を没落させたのかもしれない。

中原の二里头文化と海岱の岳石文化は、文明の発展度に差異があり、文化の特徴にも違いがある。そのため、かりに二者間に影響が生じあうとすれば、それは容易に観察しうるものである。だが二里头文化と岳石文化のあいだの相互的影響の状況を比べると、二里头文化の岳石文化への影響であろうと、相互的な影響であろうと、その広がりや深さはいずれも

十分なものではなからう。これは、文献上にみられる夏代の海岱諸夷の多くがまだ華夏へと融合していないことと一致する。

三―三 商王朝の夷夏融合

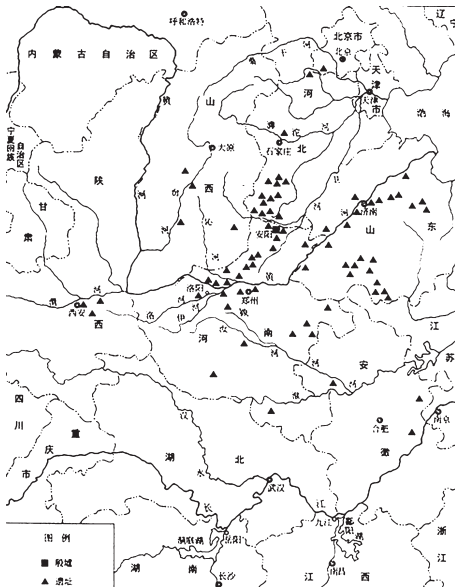
夏朝から商朝に入ると、多元一体的複合制国家構造はさらに整うとともに、東夷の華夏への融合の広さと深さがいずれもすすむ。商代の夷夏融合の広さについては、『中国考古学夏・夏商卷』における早商・中商・晩商という三つの時期の商文化の分布図によって説明できる。というのも、この三つの時期には商文化が徐々に東へと拡張しており、商の夷に対する融合と正比例の関係にあるはずだからである。「早商文化分布示意图」において商代早期に、済南の大辛莊遺跡以外に商文化が東へ分布しているのは、おもに豫東地区である。

「中商文化分布示意图」において商代中期に、商文化は東へと大きく拡大し、つとに泰沂山脈のラインに至っている。済南の大辛莊遺跡は、泰沂山脈以北の商文化の典型例で、済寧の潘廟遺跡は魯西南の商文化の典型例である。「晩商文化分布示意图」において商代晩期の商文化は、とうに東に拡大して泰沂山脈北側の淄河、泲河流域に到っており、青州の蘇埠屯遺跡はその典型的な商文化の遺跡である。

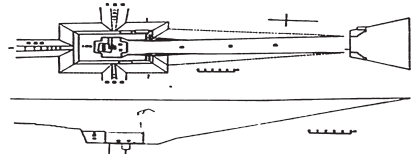
商代の夷夏融合の深さに関しては、青州の蘇埠屯の商代「亞醜」大墓を代表格とする。蘇埠屯遺跡で発見された商代一号大墓には、四つの墓道があり、墓室面積は五十六㎡に達

し、殉葬犬は六匹で、殉葬者は四十八人にもなる⁽²⁰⁾。四つの墓道を備える、かかる規格は、殷墟の王陵と同様である。蘇埠屯の一号大墓からは、「亞醜」族徽銘文の鑄込まれた大銅鉞が出土しており、五、六十件の伝世青銅器のなかにも「亞醜」族徽銘文があり、ゆえにこれは「亞醜」を族徽とする諸侯国である。

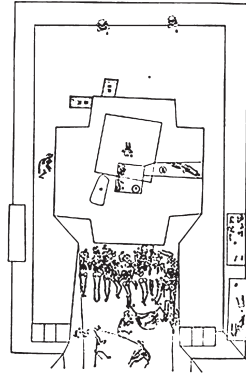
甲骨文によれば、商王朝で「小臣」という官職を担う者のひとりに、「小臣醜」とよばれる者がいる（『甲骨文合集』3640）。この「小臣醜」は山東省青州県蘇埠屯一帯の「亞醜」諸侯国出身である。「亞醜」族徽から判断すると、彼は商の



図一 晩商文化分布示意图



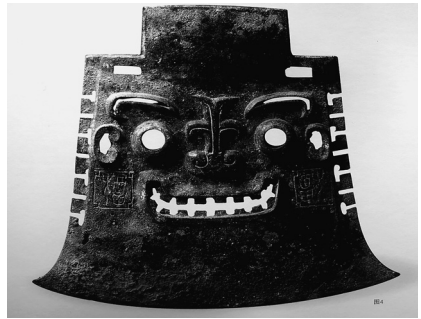
図二 山東省青州県蘇埠屯一号大墓



図三 山東省青州県蘇埠屯一号大墓殉葬

王族でなく、東夷の人であろう。だが、この墓に副葬された青銅器（鼎・觚・爵・罍・罍・罍）の形制・組み合わせや、陶器（觚・爵・簋・豆・盤・罐）の形制・組み合わせは殷墟と同じで、ゆえに亞醜は深く華夏化した夷人であり、とうに華民族の中に溶け込んでいる。

夏商時代には、華夏から海岱にやってきた華夏人もいた。たとえば『左伝』昭公二十年には、山東の斉国の国都について「昔爽鳩氏始居此地、季荝因（因襲）之、有逢伯陵因之、蒲姑氏因之、而後大公因之（昔爽鳩氏は始めて此の地に居り、季荝は之に因り、有逢伯陵は之に因り、蒲姑氏は之に因り、而る後に太公は之に因る）」とある。『国語』周語下には「則我皇妣大姜之姪伯陵之後、逢公之所憑神也（則ち我が皇妣大



図四 蘇埠屯一号大墓出土銅鉞

姜の姪、伯陵の後、逢公の憑る所の神なり）」とある。これによれば、逢伯陵は姜姓で、炎帝と同姓である。『山海経』海内経にも「炎帝之孫伯陵（炎帝の孫は伯陵）」との説があり、『国語』の説と合致する。これらはみな、姜姓の華夏族が相当早くに山東にやってきていたことを証明する。このほかに、山東省寿光県の紀国や、山東省莒県の向国は、みな姜姓である。それらの山東における登場は、みな西周の前であり、華夏族がつとに山東地区に遷徙した例である。

三―四 まだ華夏へと融合していない夷人——人方
甲骨文には、たくさんの「王征人方」の記録がある。「人方」とは「夷方」で、「王征人方」とは「王征夷方」である。



図五 「亞醜」族徽銘文

たとえば以下の通り「甲骨文・金文の訓読は省略」。

乙卯卜、貞、王其征人方、無災。〔屯南〕2370

乙巳卜、…王田…亡…兕二十又…来征人〔方〕。

〔合集〕36501)

二月癸巳、惟王来征人方、在齊陟。〔合集〕36493)

癸卯王卜、貞旬亡禍。在十月又一、王征人方、在商。

癸丑王卜、貞旬亡禍。在十月又一、王征人方、在亳。

癸亥王卜、貞旬亡禍。在十月又一、王征人方、在雀。

〔癸〕西王卜、在□、貞、旬亡禍。〔在〕十月又二、〔王〕

征人方。〔英藏〕2524)

甲骨文のほかに、商代の青銅器銘文中にも「王征人方」の記録がある。たとえば商代の「小臣餘犀尊」の銘文に、

丁巳、王省夔京。王賜小臣餘夔貝。唯王来征人方、唯王

十祀又五、彤日。

とある。小臣餘犀尊の青銅器は、十五祀の「征人方」の帰途に铸られたと考えられる。銘文中の「唯王来征人方」の語は、卜辞の「二月二月癸巳、惟王来征人方、在齊陟〔合集〕36493)」や「五月癸卯、唯王来征人方、在齊陟〔合集〕36495)」の「唯王来征人方」とまったく同じである。銘文中の「唯王来征人方、唯王十祀又五、彤日」は時間署辞で、そのなかの「十祀又五」は紀年であり、「彤日」は周祭の祭祀紀による時間署辞で、前の干支日と合わせて使用するものである。研究によると、商代末期には、このように干支を用いて周祭の祭

祀の紀日を加える制度がさかんとする。商王の帝乙・帝辛の時代には、十祀のときに「征人方」の戦役があるだけでなく、十五祀のときにも「征人方」の戦役があり、ほかの時期にも「征人方」が行われたかもしれない²²⁾。ゆえに晩商期の商王は人方と持続的に戦争を行ない、このことは『左伝』昭公十一年で叔向が「桀克有緡以喪其國」とのべていることと、関連づけうるものである。つまり、商の紂王は、東夷に過度に兵を用いたために国力を消耗し、かくしてようやく周の武王は紂を討ち、一挙に成功をおさめることができたのである。

商王が東方征伐を要したのは、東方の謀反が、おおよそ叛服常なき状態にあったためである。謀反とは、商王から離脱する必要があることであり、とうぜん複合制的王朝国家構造のなかで、かかる状況下にあつては、夷夏の融合もすすみにくい。

蘇埠屯の「亞醜」諸侯大墓からは、夷夏融合の広さと深さの点で、商王朝が大きく発展していた反面、商代の人方(夷方)はまだ華夏民族へと融合していなかったことがわかる。華夏へと融合していない夷人は、商代以後の西周・春秋戦国時代には、夷華融合を果たす。本文第一節では、多く『左伝』のいう「東夷」を引用したが、じっさいには春秋時代になると、その「東夷」はすでに残留部分であり、これら残留した東夷は、まだみずからの伝統文化の特徴を保持しているため、当時の華夏民族とは区別される。戦国時代における諸国兼并

をへて、齊国などの大国が、残留している東夷をみずからの行政管轄の範囲内に入れたのち、いわゆる「東夷」の文化はかんぜんに華夏へと融合し、その族区分も消滅へと向かい、秦漢時代になると、海岱地区はすでにまったくの華夏文化区となった。

以上をまとめると、夷夏互化の過程は、五帝時代から始まって夏商西周をへて、さらに春秋戦国へといたるのであり、夷夏互化には二つの意味がある。第一は相互的転化である。第二は相互的影響である。相互的転化とは、片方の小族群が遷徙することによって、もう片方にはめ込まれ、最後には融合変化して相手方になるという様式である。もうひとつの様式「相互的影響」は、双方向もしくは多方向的にそれぞれ拡張するうちに、互いに遭遇してぶつかり、戦争さえ起こし、最後にある形式の「政治的統一」(かかる「政治的統一」は、連盟や連合体であることもあれば、単一制的国家や複合制国家であることもある)へと融合するというもので、その結果はしばしば、相手のなかに自己があり、自己のなかに相手がいるということになり、ゆえにこれは一種の互化である。五帝時代〜春秋戦国時代に、夷夏関係がへた互化融合には「このように」、片方がもう片方へと遷徙してはめ込まれ融合する「嵌入式」方式もあれば、戦争や兼併をへて融合する方式もある。どちらの融合であっても、その融合はけっして一方向的にたんに同化するのではなく、しばしば双方向的な

のであったのである。

注

(1) 傅斯年「夷夏東西說」(『慶祝蔡元培先生六十五歲論文集』國立中央研究院歷史語言研究所集刊外編第一種、一九三三年、一〇九三〜一一三四頁)。

(2) 王震中「從複合制國家結構看華夏民族的形成」(『中國社會科學』二〇一三年第一期、一八九頁〜一九六頁)。王震中「從部族國家與到民族國家與華夏民族的形成」(『中國古代國家的起源與王權的形成』中國社會科學出版社、二〇一三年)。「柘陽平詁」(『中國古代國家的起源與王權的形成』汲古書院、二〇一八年、五三九〜五九三頁)。なお以下、本訳稿では王震中著書を引用する場合、すべて訳書の頁数を挙げる。

(3) 春秋時代の「東夷」という語はあきらかに、海岱地区で未華夏化の土着の族群である。だが「夷、蛮、戎、狄」はまだ画一的に「東、西、南、北」に分配されてはいない。戦国中後期以降、人びとは画一化を求めようになり、「東夷」「南蛮」「西戎」「北狄」の概念が形成された。たとえば『礼記』王制篇に「中國、戎夷五方之民、皆有其性也、不可推移。東方曰夷、被髮文身、有不火食者矣。南方曰蠻、雕題交趾、有不火食者矣。西方曰戎、被髮衣皮、有不粒食者矣。北方曰狄、衣羽毛穴居、有不粒食者矣。中國、夷・蠻・戎・狄、皆有安居・和味・宜服・利用・備器(中國、戎夷五方の民、皆な其の性有り、推して移すべからず。東方を夷と曰い、被髮文身し、火食せざる者有り。南方を蠻と曰い、題を雕み趾を交え、火食せざる者有り。西方を戎と曰い、被髮して皮を衣、粒食せざる者有り。北方を狄と曰い、羽毛を衣て穴居し、粒食せざる者有り。中國・夷・蠻・戎・狄は皆な安居、和味、宜服、利用、備器有り)」とあ

- る。童書業『春秋左伝研究』（上海人民出版社、一九八〇年、二五二～二五五頁）参照。
- (4) 王震中「甲骨文亳邑与郟亳」（『商族起源と先商社会変遷』、中国社会科学院、二〇一〇年、六一～九九頁）参照。
- (5) 朱玲玲「舜为「東夷人」考」（『南方文物』二〇一一年第一期、一四〇～一四四頁）。
- (6) 唐堯は最初、現在の河北省一帯で活動し、その後しだいに南遷し、最後は現在の晋南臨汾と翼城一帯に定住した。山西省襄汾陶寺遺跡の古城は帝堯・陶唐氏の都城の可能性もつとも高い。帝堯・陶唐氏の族源は北の戎狄系である。王震中「從複合制国家結構看華夏民族的形成」（『中国社会科学』二〇一三年第一期、二〇一～二〇二頁、注二前掲書（四八二～四八九頁）参照。王震中「陶寺与堯都——中国早期国家的典型」（『南方文物』二〇一五年第三期、八三～九三頁）。
- (7) 『左伝』昭公十四年「夏書曰「昏・墨・賊・殺・皋陶之刑也」（夏書に曰く「昏・墨・賊・殺は、皋陶の刑なり」と）。
- (8) 『呂氏春秋』君守篇「皋陶作刑。（皋陶、刑を作る）」。
- (9) 『史記』夏本紀「皋陶作士以理民（皋陶は士と作りてて以て民を理む）」。
- (10) 『史記』鄭世家「秦、嬴姓、伯翳之后也（秦、嬴姓、伯翳の後なり）」、『國語』鄭語「嬴、伯翳之后也。……伯翳能議百物、以佐舜者也（嬴、伯翳の後なり。……伯翳は能く百物を議し、以て舜を佐くる者なり）」。
- (11) 『呂氏春秋』勿躬篇「伯益作井（伯益は井を作る）」、『淮南子』本經訓「伯益作井、而龍登玄雲、神棲昆侖（伯益は井を作り、龍は玄雲に登り、神は昆侖に棲む）」。
- (12) 邵望平「賈湖類型是海岱史前文化的一個源頭」（『邵望平史学・考古学文選』山東大学出版社、二〇一三年、一三三～一三四頁）。
- (13) 廟底溝類型の仰韶文化は黄河下流域に強烈な影響を与えただけでなく、長江下流域の大溪文化、東北地区の紅山文化にも影響を与えた。王仁湘「中国新石器時代花紋彩陶圖案研究」（『考古与文物』一九八九年第一期、四九～五六頁）参照。この影響は、西にははるか甘肅省青海地区に及び、北は河套甸地区を越え、兩区域内で濃厚な廟底溝類型仰韶文化の色彩を帯びた遺物が見つかっており、それらは直接「廟底溝文化」に含まれるとされることがある。中国社会科学院考古研究所編著『中国考古学・新石器時代卷』（中国社会科学出版社、二〇一〇年、二六八頁）参照。
- (14) 中国社会科学院考古研究所編著『中国考古学・新石器時代卷』（中国社会科学出版社、二〇一〇年、三二一頁）、鄭州市文物研究所『鄭州大河村』（科学出版社、二〇〇一年、五八八～五八九頁）参照。
- (15) 中国科学院考古研究所洛陽發掘隊「河南偃師「滑城」考古調查簡報」（『考古』一九六四年第一期、三〇～三五頁）。
- (16) 張脱「河南省平頂山市發現一座大汶口類型墓葬」（『考古』一九七七年第五期、三五三頁）。
- (17) 王震中注二前掲書第八章（六五九～六八〇頁）、第十章（六五九～七七三頁）。
- (18) 王震中注二前掲書第六章（五三九～五九三頁）。
- (19) 方詩銘・王休齡『竹書紀年輯校』（上海古籍出版社、一九八一年、五頁～一五頁）。
- (20) 山東省博物館「山東益都蘇埠屯第一号奴隸殉葬墓」（『文物』一九七二年第八期、一七～三〇頁）、山東省文物考古研究所・青州市博物館「青州市蘇埠屯商代墓地發掘報告」（『海岱考古』第一輯、山東大学出版社、一九八九年、二五四頁～二七三頁）。
- (21) 常玉芝『殷商歷法研究』（吉林文史出版社、一九九八年、一一四～一一五頁）。

(22)

鳥邦男『殷墟卜辞研究』（弘前大学文理学部中国学研究会、一九五八年、四〇一～四〇二頁）はかつて帝辛の八祀征人方の歴譜をならべた。

（王震中…中国社会科学院大学特聘教授・中国社会科学院学部委员）

（柿沼陽平…早稲田大学文学学術院准教授）

（小田凌平…早稲田大学大学院修士課程）